

奪われたものは 人生そのもの



梅本 美有

壊れいく日常

1回目(中学3年生)のHPVワクチン接種後もかすかな違和感があったが、それがワクチンと関連するなど思いもよらなかった。高校入学後すぐに3回目接種の「お知らせ」があり、何の疑問も持たずに接種した。副反応症状が出てからのこの14年間、痛みを感じない日はほぼない。朝目が覚めたらまず、身体のどこかが痛く、血液が鉛となったかのような重だるさを感じながら起き上がる。もちろん、そんな倦怠感や頭痛が酷くて起き上がれない日もある。吐き気がしたり、めまいがしたり、痙攣が続いたり。数えきれないほどの症状のせいで、しなければならないこと、やりたいことを阻害される日常が今ではもう当たり前となってしまった。

28歳となった今、人生の半分は症状に苦しむ日々で、もう健康だった時の痛みのない身体を思い出すことはできない。まともに働けず、月のうち1週間以上は体調が悪く家から出ることもできない。

将来は大学に進み、一人暮らしをして保育士として働いて自立した生活を送るんだらうなどと当たり前のよう考えていた。けれどHPVワクチンがそんな私の夢を、将来を、全てを、奪っていった。

それまで生きてきた中で感じたことのない耐え難い痛みや吐き気、倦怠感に動悸。中学時代はほとんど休んだことはなかったが、高校では欠席が増え、ついには朝起き上がることができなくなり、通うことさえ難しくなっていた。それでも「友だちに会いたい、学校に行きたい」と必死だった私は、文字通り這うようにして1時間以上かけて起き上がり、母の手を借りながら制服に着替え、学校まで車で送ってもらって授業を受けていた。頭が痛くて倦怠感で座っているのもしんどい授業中、耐えられない吐き気で何度もトイレに駆け込み、便器に顔を突っ込んでえづいていた。

さすがにおかしい、私の身体の中で何か異常なことが起こっている、と疑い始めた。私はいくつかの病院へ行った。しかし、どこも「何か学校で嫌なこと

もあった?」「症状が出ているのは気のせい」と言う。私の壊れていく身体に真剣に向き合おうとする医師はいなかった。身体の不調は病院に行けば治療してくれると思っていた「常識」がガラガラと崩壊していった。

学校に行きたい

1日さえも学校にいられることがなく、遅刻・早退・欠席が続き、徐々に通えなくなっていく私に、学校が何か支援をしてくれることはなかった。それどころか、私と母を呼び出して「このまま進級できたとしても卒業するのは難しいんじゃないか」と切り捨ててきたのだ。課題もほとんど忘れたことがなく、成績も悪くはない、割と真面目な生徒だったと思う。

校長の裁量で保健室登校やレポート提出などで単位を取得することは可能であったはずだ(当時はオンライン授業などなかった)。しかし、高校側は、母が何度も足を運んで学業を続けたいと願っても受け入れることはなかった。

このまま通いたい、みんなと卒業したい、そんな気持ちでいっぱいだったが、私の身体はとっくに限界を迎えていた。立っているのも精一杯で涙を流す余裕もない私は、泣いている友人に別れを告げ、単位制高校への転学を決めた。自室のベッドに横になって起き上がれない私に、母が「もう要らないね」と声をかけて、それまで使っていた制服や学校鞆を黒いゴミ袋に詰めた。母の顔は見えなかった。

転学先は体調を理解し配慮してくれて、週2、3日ほど昼から登校してレポート提出で単位を取得できた。当時の私は、光過敏と全身の痛み、ふらつき、吐き気、倦怠感の症状が特に酷かった。家から最寄り駅までの800mほどを、サングラスをかけて杖をつきながら30分以上かけてゆっくり歩いていた。ある時、調子がよくてサングラスを持たずに登校した。数時間後に室内の光があまりにも痛く感じ始め、目をギュッと閉じて机に突っ伏し、友だちに千円札を渡した。「お願い、これでサングラスを買ってきて」